秩父愁色

島村利正

秩父愁色

島村利正

新潮社版

秩父愁色

昭和五十二年七月十日　印刷
昭和五十二年七月十五日　発行

定価　一三〇〇円

著者　島村利正
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社

〒162　東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇〇三)二六六一五一一一業務部
二六六一五四一一編集部
振替　東京四―八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷　株式会社金羊社　製本　神田加藤製本

© by Toshimasa Shimamura 1977
Printed in Japan

秩父愁色

目次

多摩川幻想……七
隅田川……三
鮎鷹連想……毛
板谷峠……盌

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

白い舞踏会……二一
秩父愁色……一五九
あとがき……二四一
発表誌一覧……二四三

装画　難波淳郎

秩父愁色

多摩川幻想

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一

ふるさとの、深い山々や川の景観は、ときどき夢のなかに現われてきて、眼が覚めたあとも、しばらくは、晩秋の紅葉色の残光をくすぶらせている。生れ故郷の夢には、そのときの季節の色が出てくるようで、新緑の、若葉の匂いのすることもある。

第二の故郷と思っている奈良の夢には、季節感はすくなく、現われてくる風景が、いつも同じように蒼然としている。

夢に色彩や匂いがないというのは間違いのようだ。山国の夢に四季の彩りがあって、大和の閑雅な風景に色がすくないのは、そこですごした年月の違いによるのだろうか。

多摩川のほとりの、武蔵野の隅に住むようになって何年になるか。いまでは故郷の信濃や奈良よりも、いちばんながい歳月をすごしたことになる。不思議なことに、多摩川の夢はほとんど見ない。しかし、以前の、村であったころの思い出は、風景画の残欠のように、ときどき夢のなか

に出てくる。胸黒という鳥の群がる麦畑の刈あとや、この辺に多い欅や樫の樹林、そして、最初の十年ほどを過した妻の実家の、農家特有の暗いお勝手や納戸、くずれかかった土蔵の壁、ふかいふかい撥釣瓶の井戸、それらの情景のなかに、何人かの故人の姿も登場してくる。

この村に、妻の実家のあったことが、ここに住みつく縁になったが、多摩川の流れがなかったならば、これほどの歳月をはたして過し得ただろうか。現在の多摩川は見るかげもない汚水の流れに変ってしまったが、それでも、周囲の風光はむかしの面影を多分にのこしている。

多摩川の土堤に立てば、対岸の町の上に多摩の横山が見え、晴れた日には、黒々とした丹沢山塊の上に、三段構えで富士が姿を現わす。上流にかすむ甲州、秩父の山も見える。そして、多摩川は、ひとたび怒れば、いのちを取りもどしたように両岸を洗う奔流にもなる。

私は雨の日でない限り、落日の時刻をはかって、多摩川土堤に出てみる。歩いて五分とかからない。夢にならないのは、多摩川との毎日の出会いのためだろうか。

この村が町になったのは戦後であるが、いまは市になっている。しかし、東京の市街地に比べれば、その変貌ぶりはものの数ではないかも知れない。昭和二十年の五月、山の手爆撃の巻添えを食って、農協の倉庫のほか、何軒かの農家が焼かれているが、戦災被害はすくない。むしろ、三月九日夜の本所、深川の大爆撃から、八月一日の八王子焼亡まで、この村は、ふかい森のなかに身を沈めて、夜空を焦す都会の劫火を、じっと見つめていた傍観者といえるかも知れない。

そういう意味では、多摩川はいっそうの傍観者に違いなかった。むかしの多摩川……昭和十二、三年の多摩川を知っている村びとは、現在どのくらいいるのだろう。この川の、むかしの流れの

美しさは、いまでも一言で云い現わすことが出来ない。故郷の川も清流であったが、巨巌を嚙んで奔る流れは荒く、水の質は硬かった。奈良の近くの木津川は、青い絵の具をうすく融いたような色があったが、その川で泳いだことはない。

鮎つりを覚えて、岩手県から飛騨の奥まで、多くの川を釣り歩いたが、やはり、多摩川の水の柔軟さに及ぶところはないように思われた。水成岩の川というだけではない。練絹のような、中年のおんなの肌のような、しとしとと濡れてくる、あのころの水の感触は何がつくり出したのだろう。源流になる、奥多摩川の水ともすこし違うのは、中流辺から流れこむ、武蔵野の伏流水の、練れたやわらかさが加っていたためだろうか。

また、当時の村の老人たちは、手足の疵は、この流れに浸せば治ると信じていた。奥多摩の鉱泉がそのまま流れこんでいた。事実、他国の川での草鞋ずれが、この川で治った例は何回もある。

鮎は小ぶりであった。九月末からの落鮎だけが大きかった。土地の漁師は、夜の投網を、立ちのぼる鮎の匂いで打っていた。西瓜のような涼しい匂いが鮎の香気であるが、この川のは香りが特に高かった。明治の初期まであったという、渋谷近くの大橋の鮎市へ、相模川の漁師と速足を競いながら、鮎籠をかついでいったはなしも古老から聞いている。相模からの大山街道を、夜通し速足してきた相模川の漁師は、登戸か二子玉川の渡しを、まだ暗い川霧のなかで越える。多いときには十人以上もいたという。その足音が、多摩川の漁師の出発の合図になった。三軒茶屋までは先になりあとになり、そして、茶店で小憩。最後の大橋までの下りは駈足のようであったという。値段は多摩川鮎の方が高かったようだ。

また当時のこの村には、筏道とよばれる小径の断片がところどころにのこっていた。奥多摩からの木材流しの筏を、多摩川の流れに乗せて六郷先の河口までとどけ、仕事がすむと、彼等は、菅笠に巻蓑、腰に筏鉈の恰好で、多摩川に近い馴れた小径を、急ぎ足で山へ帰ってゆく。いつも無口で、その足は飛ぶように迅かったという。私は多摩川の対岸、川向うの村に、この筏道をさがしたことがあったが見当らなかった。相模側は通らなかったのだろうか。

登戸の渡しは、戦後の二十九年ごろまでのこっていた。小田急線の鉄橋とならんだ、現在の歩道橋をかねた水道橋が架かるまで生きていた。渡しを渡った川向うは、多摩の横山の下方に沈んだ長十郎梨の村であった。下流の、川崎の大師河原の梨づくりの名人、長十郎が伝えたという長十郎梨は、そのころの新種の二十世紀梨より古風な甘さがあった。稲田堤の桜と白い梨の花。花季がつづいている。

梨畑の中央を一本の街道が通っていた。いまでは府中街道とよばれているようであるが、むかしは鎌倉への街道のひとつではなかったろうか。すこし上流に菅の渡しがある。そのまたすこし上流に、はじめて橋らしい多摩川原橋が架かっている。昭和初期の橋だろうか。江戸名所図会に見える矢ノ口の渡しの近くになるようだ。

私はよく自転車で、登戸の渡しから相模側に渡り、梨畑のなかを上流にはしって、多摩川原橋か菅の渡しで東京側にもどってくる、そのコースを何回かはしった。川向うからこちら側の村を望むと、森が深かった。なかでも、伊豆美神社とよばれる郷社の、杉の老木群は見事であった。千メートルの川原を挟んで、その黒々とした森は、おーいと、太い武張った声で呼びかけてくる

ような感じがあった。

上流の多摩川原橋か菅の渡しから村にもどるには、千町耕地とよばれる水田を越えなければならない。多摩川に沿った見渡す限りの青い稲田は、豊富な湧水を自在に使って、草ふかい小溝のながれには、鯰や泥鰌がいっぱい潜んでいた。以前は海老がになどという奇妙なものはいなかった。透明で、小ぶりな川海老ばかりであったが、そいつの腰には、妙につよい跳ねのちからがあった。

二

この村には、小学校はひとつしかなかった。いまは八校になっている。中学校が三つに、高等学校も立派なのが出来た。昭和十二、三年には四、五千名であった人口が、いまは七万名以上になっている。

村のひとは、他国からの移住者を、きたり者、とよんでいた。どこの土地にもよくある例で、差別語であるが、特別の悪意や憎悪感はすくないようであった。だがいまは、きたり者の方がはるかに多くなって、もと者の数はすくない。

この村の西南、以前の六郷用水取入口近くに、楽翁、松平定信の書になる万葉の碑が建っている。真物(ほんもの)はむかしの大洪水で流されて、六郷までの河原のどこかに埋っている。いまのは拓本による再建の碑である。多摩川にさらす手づくりさらさらに、何ぞこのここだ愛(かな)しき、が、万葉仮名で彫りつけてある。立派な書体であるが、拓本趣味者のなぶりものになって、碑面は真ッ

黒である。この歌を詠んだ万葉歌人は、多摩川の水に、手や足を実際に浸けたことがあるに違いない。むかしの練絹のような水の肌ざわりが、歌のこころになっている。

六郷用水はいまは必要がなくなり、埋め立てられて、立派なバス通りになった。草ふかい用水土堤は、この村いちばんの蛇の棲息地であったが、彼等はみんな殺られてしまったのだろうか。対岸からも偉容が眺められた伊豆美神社の老杉は、いまは枯死して一本もない。武蔵野から多摩川に向って流れていた伏流水が、いつの間にか涸あがってしまったのだ。この神社の、著名であった樹齢四百年の黒松の巨木も、三、四年前の、風もない日に倒れている。私はそのときの地響きを聞いている。さようならと叫んでいるようであった。

藤塚、亀塚など、多くの古墳がこの村の特色になっていたが、いま遺っているものはすくない。江戸名所図会に紹介されている泉龍寺には、徳川期らしい良弁僧都の像がある。良弁の草創であるから当然かも知れないが、奈良東大寺の良弁像にどこか似ている。作者は奈良まで出かけて、あの秘像を見ているに違いない。

良弁が雨請いの法を修したことから湧出したという、むかしの和泉村の地名にもなった泉が寺のすぐ脇にある。槻や楓、松の大木に囲まれ、蛇形の弁天も祀ってある。どんな旱魃に際しても、湧出量に変化がなかった。武蔵野の伏流水の典型的な表情があった。が、いまは涸れて薄汚ない人造池になっている。その脇に、むかしの松の大木だけがのこっている。

この村には、長屋門が二つある。覚東という字にあるほうが古いようだ。その門の脇に孟宗竹の林があったが、いまは見当らない。小ぶりの手桶になるほどの太いヤツで、私は何回か見にい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.